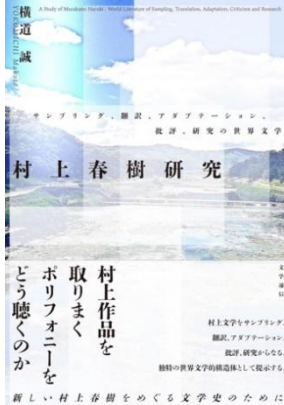


【自著紹介】 横道誠 『村上春樹研究』

——サンプリング、翻訳、アダプテーション、批評、研究の世界文学』
(文学通信 2023 年 9 月)



本書は、このオンライン雑誌『MURAKAMI REVIEW』に掲載したものを中心として複数の論文を再構成し、一冊の研究書にまとめたものだ。その概要は以下のとおり。

序 ポリフォニーを志向する研究書

I 「大江・筒井・村上」が結ぶ星座

第一章 大江健三郎の「ファン」としての村上春樹

第二章 村上が「好きな作家」としての筒井康隆

II 海外体験と外国語訳

第三章 渡独体験を考える——「三つのドイツ幻想」と「日常的ドイツの冒険」

第四章 『国境の南、太陽の西』とその英訳、新旧ドイツ語訳

第五章 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の八つの翻訳

(英訳、フランス語訳、ふたつの中国語訳、ドイツ語訳、イタリア語訳、ロシア語訳、スペイン語訳)

III 音楽・映画・ポップカルチャー

第六章 音楽を奏でる小説——『ノルウェイの森』を中心とした諸考察

補論 村上春樹と「脳の多様性」——当事者批評と健跡学へ

第七章 自閉スペクトラム症的定型発達の

——映画『バーニング』と『ドライブ・マイ・カー』について

第八章 ポップカルチャーの文学的トポス

結語 ポリフォニーを聴くこと

あとがき

内田康は、書評「大いなる〈序章〉、あるいは助走——横道誠著『村上春樹研究 サンプリング、

翻訳、アダプテーション、批評、研究の世界文学』（『村上春樹とアダプテーション研究』2号、村上春樹とアダプテーション研究会、2024年1月、71-76ページ）で、本書の大枠を作った論文（『MURAKAMI REVIEW』0号に掲載）について、つぎのように懐古した。

これを読んだ時の衝撃を、評者は今も忘れることはできない。その理由は〔中略〕今後の村上春樹研究の方向性が如何にあるべきか、評者が漠然と空想しながら、自らの力不足によって手を付けられずにいた内容が、或いは、少なくともその端緒が、目に見えるかたちをとってそこに展開されていたからである。

その上で内田は本書をつぎのように評価する。

とりわけ重要なのは、著者による以下の言揚だろう。「私たちはもう「文学の文学史」ではなく、「文学的想像力の文学史」を考えるべきだと主張したい」（本書 p.332）。本章の章題に掲げられた「文学的トポス」とは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』等を遺した E. R. クルツィウスによる概念で、文学の流れの中で継承されていくモチーフや類型などだが、横道氏はこれをポップカルチャーの領域にまで持ち込み、漫画雑誌『ガロ』から東浩紀や幾原邦彦、新海誠ら「セカイ系」の創作に至るまでの、村上が影響を受け、また村上に影響を受けた、現代日本のポップカルチャーの展開過程を、所謂「文学」のそれと併せて総合的に把握しようと企図するのだ。このような、「世界文学」と「セカイ系」とが「村上春樹」において交差する、などという壮大な見取り図を示されたら、眩暈を起こさない方がどうかしている。けれども考えてみれば、所謂「純文学」とポップカルチャーとの双方に深く根を下ろした村上の文学の全貌を解明するのに、この「文学的想像力の文学史」というアプローチほど最適なものが他にあらうか。

また橋爪大三郎は書評「世界文学であり、日本文学であること」、『毎日新聞』2024年3月2月（土）朝刊、16面）で、本書をつぎのように評価した。

野心的な書物だ。村上春樹がいかに世界文学なのかを描き切り、しかも日本文学だと位置づける。この離れ業を多彩なアプローチと綿密な論証でやりとげている。〔中略〕村上作品は目の前にあるのに、これまでうまく論じられて来なかった。村上氏本人が批評家にアカンベーをしている。でも作品には本人も知らない創作の秘密が隠れているはず。本書はそこに攻め込み、橋頭堡を築いた。ドイツ文学が専門の著者のホームランだ。

両者による書評に心から感謝したい。

【横道誠（文学・当事者研究）】